

認知症ケアOJTの意義と課題 ～意識調査を通してわかったこと～

鹿児島県曾於郡大崎町 介護老人保健施設 サンセリテのがた

発表者:下ノ堀 愛 (介護職)

共同演者:春別府稔仁(医師) 宮崎千鶴(准看護師) 山口翔平(作業療法士)

橘拓真(作業療法士) 鈴木誠(介護福祉士) 小重夏恋(介護福祉士)

川畑綾香(介護福祉士) 伊藤千里子(介護福祉士) 塚野咲(介護職)

南野朝成(介護職) 新留巨樹(臨床心理士) 竹元康博(社会福祉士)

【はじめに】

当施設は認知症専門棟を有しており、認知症ケア委員会を中心に認知症ケアの実践に取り組んでいる。主な活動は施設内研修の開催、新入職者研修である。しかし、委員会が思うほど参加人数は増えず、認知症介護の質の差は参加頻度の差であると思っていた。だがこれまで、研修機会の提供が職員の認知症対応の理解向上や定着にどのように影響するのかは確認していなかった。そこで、新入職者研修を受講した職員を対象に意識調査を実施し、定例研修を含めた研修参加による理解度の変化を調べ、効果的な研修のあり方を考察した。

【調査内容】

認知症の疾患理解やケアに関する調査票を作成し、自由記述形式で実施。

- ・対象:H26年4月1日～H28年5月31日の間に入職した職員20名。
- ・期間:H27年度、H28年度の新入職者研修の前後に実施。H29年(6～12ヵ月後)に準監視下で再実施。
- ・採点:評価できるものを2点、やや評価できるものを1点、無回答や評価できないものを0点、文章回答は7点を最高点として評価(総点62点)。
- ・比較:①研修前と後、研修後とH29年、②定例研修への参加頻度で3群に分けて群間比較、③各群で研修後とH29年を比較し、t検定を実施。

【結果】

- ①研修前平均点は38.9点、研修後は48.9点で有意差を認めた。H29年平均点は38.8点と研修前と変わらず、研修後の平均点との有意差を認めた。
- ②H29年の各平均点は2回以上参加群49.0点、1回参加群37.4点、不参加群28.5点。各郡間は、2回以上参加群と1回参加群、1回参加群と不参加群でいずれも有意差は認めないが、2回以上参加群と不参加群で有意差を認めた。
- ③2回以上参加群は、研修後平均点は51.5点、H29年は49.0点で有意差は認めないが、2回以上研修に参加することの効果を確認できた。1回参加群は、研修後平均点は48.7点、H29年は37.4点で有意差を認めた。不参加群は、研修後平均点は46.1点、H29年は28.5点で有意差を認めた。

【考察】

新入職者研修で理解は向上したが、半年～1年経てば研修をしていないのと変わらないことが分かった。定例研修の参加頻度では、研修に参加している群は理解定着していることが検定上確認できた。また、参加機会が少ない程、理解低下は顕著であり長期的にみると、1回の研修では理解の定着は困難であることが分かった。

新入職者研修のみでは知識定着は難しく、継続的に定例研修に参加する働きかけが必要である。その為に、研修テーマ別にカリキュラムを組むなどして選択研修制を導入し、定例会不参加群に対する別の対応方法を設定する必要もあると考える。また、調査結果を職員に示して定例研修の重要性を訴え、継続した研修機会を提供し、認知症ケアのスキルアップを図っていきたい。